
飲める醤油

登場人物

英	スミス	横橋	佐山	奥寺	桜子	浩二	醬太
ハナブサ	スミス	ヨコハシ	サヤマ	オクデラ	サクラコ	コウジ	ショウタ
					長女	次男	長男

シヨウタが中央に立っている。

醬太 人生は生まれるところから始まって死ぬところで終わるけど、物語はどこからでも始まって、どこでも終わることができる。俺は東京でそこそこ売れない役者をやっていたんだけど、とても気持ちのいい風が吹いていた春のある日に、親父がいきなり病気で死んで、俺は田舎に帰って来ることになった。あ、そこそこ売れない役者っていうのは、たまには仕事がある有名ではない役者ということで、具体的に言うと、日栄洋祐くらいのレベルなんだけど、まあ知らないよね、日栄洋祐。俺は好きだけどね、日栄洋祐。違う違う、日栄洋祐の話がしたいんじゃない。で、なんで田舎に帰ることになったのかというと、親父は江戸時代から代々続いている醤油醸造工場の14代目社長で、俺たち兄弟の誰かが15代目を継ぐ必要があったからだ。人生は生まれるところから始まって死ぬところで終わるけど、物語はどこからでも始まって、どこでも終わることができる。というわけで、この話は誰が継ぐのかモメにモメるけど最終的に家族の絆が深まるはあとうお みんなストリではなく、そんな感じで俺が会社を継ぐことになったその1週間後から始まる。

いつの間にかオクデラとタバタケがいる。

奥寺 じゃあ、説明しますね。

醬太 お願いします。

奥寺 ぼっちゃんはこのに来るのも初めてですよ。

醬太 ええ。

奥寺 うちの醤油はここで作っています。

田畑 ぼっちゃんも知ってる通りうちは江戸時代からずっと同じ製法を守り続けて

醬太 ぼっちゃん。

田畑 はい？

奥寺 どうかしましたか？ぼっちゃん。

醬太 その。ぼっちゃんってというのが

奥寺 あ、嫌ですか？って、嫌ですよ。

醬太 まあ。もうだいぶ大人ですし。

奥寺 そうですよ、でも、ねえ。

田畑 ぼっちゃんが幼稚園に入る前は、毎日、社長が連れてこられてましたし。

奥寺 社員のみんなで育てたようなもんですから。

田畑 どうしてもつい、あの頃みたいになっちゃんって呼んじゃいますよね。

奥寺 そうよね。

醬太 俺が幼稚園に入る前から、この会社で働いてたわけじゃないですよ？

田畑 どうしたんですか？ぼっちゃん。

醬太 だってあなたたちと知り合ったの先週ですよ？

奥寺 そうですね。

醬太 だからあなたたちは幼稚園に入る前の俺とか知らないじゃないですか。

奥寺 そうですね。

醬太 じゃあついぼっちゃんと呼んでしまうっていうのはおかしいですよ？

田畑 でもあの頃は社員全員がぼっちゃんって呼んでたんですよ。

醬太 さっきからあの頃を見てきたみたいに言ってますけど、あの頃にあなたはまだこの世界に存在してないじゃないですか。

田畑 怖い話ですか？

醬太 怖い話ではないです、こわいなこわいな なんかやだなとか言っていないですよ？

奥寺 じゃあ、なんとお呼びすればいいですか？

醬太 え？

奥寺 ぼっちゃんとしか教えてもらってないので。

田畑 嫌ならあの頃とは違う意呼び方をしたいので。

奥寺 何がいいですか？

醤油 え？

奥寺 何がいいですか？

醤油 社長？

奥寺 社長って呼ばれたかったんだ。

醤油 違うんです違うんです。

田畑 恥ずかしがらなくていいですよ。

醤油 呼ばれたいわけじゃないんです。

奥寺 大丈夫大丈夫、CEOよりは恥ずかしくありませんよ。

田畑 そうですよ、社長。

醤油 違うんです。俺は、社長と呼ばれたくて、そうしたわけではなく、しかたなく、ちようどいいの
がないから、そう呼んでもらうことにしたんです。

田畑 はあ。

醤油 本題に戻してもらえますか？

奥寺 そうですね。えっと、ここに来るのは初めてで間違いないですよ。

醤油 はい。

奥寺 うちの醤油はここで私、オクデラと。

田畑 私、タバタケが主に作っています。社長も知ってる通りうちは江戸時代からずっと同じ製法を守り続けていますし。企業秘密の製法なので、社内でも数名にしか伝えられておりません。今日はその製法をお伝えするためにきていただきました。

奥寺 1回で覚えるのは無理だとは思いますが、少しずつ覚えていっていただければと。

醤油 はい。

奥寺 今日は、全体の流れだけ理解していただければと思っています。

醤油 わかりました。

田畑 じゃ座ってください。いきますね。

醤油 はい。

テ ブルの上から袋のようなものを手に取る。

田畑 これがAの粉です。

醤油 え、あ、はい。

田畑 これに水を入れてよく混ぜてから、こっちのBの粉を加えます。こうやってねればねるほど、すみません、ねるねるねるね作ってます？

2人 ねるねるねるね？

醤油 知らないっすか、そういうお菓子。

奥寺 今作っているのは醤油です。

醤油 そうですよね。それは知ってたんですけどね。江戸時代から守り続けた製法なんですよ？

奥寺 そうですよ。

醤油 Aの粉とかありましたかね、江戸時代。

田畑 あったんじゃないですか？

醤油 絶対なかったですよ。AとかBとか呼んでるわけないし。

田畑 江戸時代見たことないですよ？

醤油 なんですか？

田畑 さつきから江戸時代を見てきたみたいに言ってますけど。江戸時代にはまだ生まれてなかったですよ？

醤油 そうですけど。なんなんですか？Aの粉って。

奥寺 Aの粉はAの粉です。

醤油 いやだから、Aの粉の原料はなんですか？

奥寺 もう教えちゃっていいのかなあ。

田畑 いいんじゃないですか？社長ですし。

奥寺
そっか。

田畑
そうですよ。

奥寺
これはトッピング クレット中のトッピング クレットなんです。

醤油
はい。

奥寺
Aの粉は。

醤油
はい。

奥寺
小聲で 塩です。

醤油
塩かい。

田畑
なんかおかしいですか？

醤油
いやおかしくはないですね、塩入ってますね、醤油。

田畑
ですよね。

醤油
じゃあBの粉は。

奥寺
Bの粉は。

醤油
はい。

奥寺
小聲で 塩です。

醤油
塩かい！今のところ塩水作っただけじゃないですか。

田畑　で、これを火にかけて水分をとばします。それがこちらです。

と、新たな容器をシヨウタに見せた。

醬太　これ塩に戻っただけですよね。

田畑　はい。そうですけど。

醬太　なんか怒ってます？あ、あれですか、そうやって2種類の塩をブレンドするみたいな。そういう工程ってことですか。

奥寺　Aの粉とBの粉は、全く同じ塩です。

醬太　なにやってんすか。なんの作業だったんですか。

奥寺　タ:バタケさん続きを。

醬太　ちよつと。

奥寺　あとでちゃんとお話しますから。
はあ。

田畑　次にですね、こちらのCの豆を用意しまして。

醬太　それたぶん大豆ですよ？

田畑　これにもいろいろやることあるんですが、いったん飛ばしますね。あとDの小麦、さきほどの

粉などの材料をあちらの機械に入れます。スイッチを入れます。あ、押してみます？

醬太 え？

田畑 押してもらいましょう。せっかくだし・

奥寺 そうね。

田畑 先に全部入れておきましたんで、どうぞ。

と、シヨウタを巨大な機械のところに案内した。

醬太 このボタンですか？

田畑 はい、どうぞ。

シヨウタはボタンを押した。

機械の起動する音がした。

奥寺 よくできました。ー

田畑 できたねえ。すごいねえ。

醬太 ああの頃のぼっちゃんじゃないんで、普通にできますよ。

奥寺 わかってもらえましたか？

醬太 え？なにをですか？

奥寺 江戸時代から代々受け継がれた製法はこの機械、14号が守っております。

醬太 なるほど。

奥寺 なので、私たちはAの粉とBの粉を混ぜたり、Cの豆の数を数えたり、Dの小麦でパンを焼いて
みたりして時間をつぶしています。

醬太 え？

奥寺 クビですか？

醬太 え？

田畑 クビですよ。

いつも間にかコウジが舞台上にいて、語りだす。

浩二 俺は大学を卒業してから世界を放浪したあとに、ここで働き始めたことになっているのだけど。

本当はこの世界を放浪なんてしていなかった、だって英語とか喋れないし。パスポートすら持っていない。あと大学も卒業できていない。その5年間、俺の体はずっと日本の埼玉県のアパートの一室にいて
ゲームの中の世界を放浪していた。簡単にいうとネットゲ廃人だったのだけど、説明するのが面倒なので、

そのことは妹しか知らない。ある日、夢から覚めたような感じで突然ゲムに飽きて、セブデ夕を全て消去して、地元に戻り、実家の会社で働き始めた。親父も含めてみんな、俺が会社を継ぐつもりだと思っていたみたいだったけど、大変さもわかっていたし、そのつもりはなかった。そういう時期がきたら、大きな企業にでも設備を売り払って、そのあとの自分の人生のことはその時になったら考えればいいと思っていた。また夢から覚めたかのように別の世界で新しい生活を始めるはずだった。ところが兄貴が会社を継いでくれることになって、俺はこの夢から覚めることなく、うちの会社で働き続けている。

ショウタ、オクデラ、タバタケはいなくなっていて、サヤマとヨコハシがいる。

ヨコハシは机に向かって座って事務仕事をしている。

佐山 なんか見えるんですか？

浩二 え？

佐山 そっち。

浩二 ああ。うん。

佐山 え？なんか見えるんですか？

浩二 UFO。

横橋 え？

浩二 とか見えたらいいよね。

佐山 なんですかそれ。

横橋 やめてくださいよ。

浩二 なんか見えてたほうがいいのかなと思ってさ。

佐山 そういうのじゃないですよ。

浩二 どういうのだったの？

佐山 大丈夫ですか？ぼ っとして。みたいなことですよ。

浩二 ぼ っとしてた？

横橋 しましたよ。

浩二 まあそうか。や、考えたことない？こう、宇宙人とかに連れ去られて別の人生が始まるのも悪くないなあ、みたいなこと。

横橋 なんですかそれ、宇宙人なんか絶対いませんよ。

佐山 宇宙のどこかにはいるんじゃない？地球にこれるかどうかは別として。

横橋 いません。

佐山 夢がないねえ。

横橋 いないものはいないですから。

佐山 でも、UFOの目撃情報とかもあるわけだからさあ。

横橋 UFOって宇宙人の乗り物って意味じゃないですか。

佐山 え？

横橋 未確認飛行物体っていう意味ですから。なんだかわかんない飛んでいる物、ってことでしかないんです。指をサヤマの額に だから仮に地球人がカラスを知らなかったら、カラスもUFOですから。

佐山 あ、そう。

横橋 はい。あ、すみません。なんかあつくなっちゃって。

佐山 別にいいんだけど。

横橋 とにかく宇宙人なんかいないということだけわかっていただければ。

佐山 あ、うん。わかったよ。で、なんでしたっけ？ぼっちゃん2。

浩二 ああ、や、親父が死んだらこの会社も終わると思ってたからさ。今もこうして働いてるのが不思議でさ。

佐山 なに言ってるんですか。

浩二 だから、宇宙人、じゃなくて、そうだな未来人とか

横橋 未来人。

浩二 あ、いないかな？

横橋 未来人は、いるでしょうね。

佐山 それはいるんだ。

横橋 時間は未来に向かって流れ続けているわけですから。

佐山 そうなんだ。

浩二 現代人でも知ってる人でもいいんだけど、とにかく、違う人生が始まる的なさ。

佐山 つまり、会社辞めたいってことですか？

浩二 そうわけでもないんだけど。

横橋 やめないでくださいよ。

浩二 だから辞めたいわけじゃないんだよ。辞めたいわけじゃないけど、そういうこともあっても悪く

ないよなあ、みたいなこと、考えない？ たまに。

横橋 あ、そのきっかけとして、なにか日常とは違うことが起こってほしいとか。

浩二 そう。

横橋 考えますね。

浩二 だよな。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

飲める醤油（おためしサンプル）

2024年5月24日 初版発行
2025年11月20日 改訂（ver.1.002）

著 者 関村俊介 © 2024年
発行者 石村寛之
発行所 有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話 0422-24-9529
